

分娩後早期からの定時人工授精技術の利用で繁殖成績up!

酪農経営の安定化と収益向上のためには、繁殖成績を良好に保つことが必要不可欠である。分娩後早期における定時人工授精技術の利用は、分娩後の初回授精日数を早め、初回人工授精受胎率を向上させることで、繁殖成績の向上に大きく貢献することができる。

内容

ホルモン製剤により排卵と人工授精のタイミングを合わせる定時人工授精技術は、従来、分娩後長期間不受胎の牛など、繁殖性に問題のある牛の受胎率向上対策として実施されてきた。しかし、分娩後早期の乳牛は高泌乳に伴い栄養状態が低いことから技術の効果が疑問視され、積極的な利用がされていない。

そこで、淡路農業技術センターで飼養するホルスタイン乳牛22頭（初産牛及び2産以上牛それぞれ11頭）に対して、分娩後早期である74-80日目にOvsynch + CIDR法（図1）による定時人工授精を実施した場合の受胎性を調査し有用性を検証するとともに、受胎牛と不受胎牛の血液生化学値を比較することで本技術の受胎性に及ぼす要因を調査した。

受胎率は59.1%（13/22）と良好であり、初回授精日数も県下平均より約20日短縮された（図2）ことから、定時人工授精技術は分娩後早期から積極的に実施することで牛群全体の繁殖性の向上につながると考えられた。

受胎牛13頭と不受胎牛9頭の血液生化学値を比較したところ、不受胎牛では慢性肝炎の指標であるGGTが分娩後有意に高値であった（図3）。慢性肝炎は分娩前後の飼料摂取量が少ない牛や、過肥状態で分娩した牛で認められる所見であることから、当該技術を効果的に活用するためには、適正な飼料給与により、牛群内からこれらの牛の割合を減らすことが重要と考えられる。

今後の方針

酪農家での現地実証試験により飼養管理の異なる牛群での受胎性を比較し、技術の有効な活用法を検証する。

石川 翔（淡路 畜産部）

（問い合わせ先 電話：0799-42-4883）

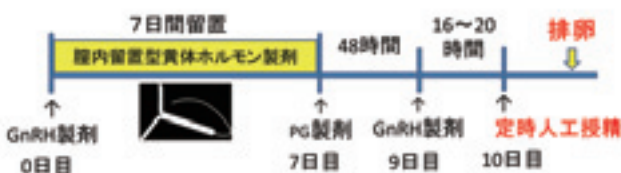


図1 Ovsynch+CIDR法の概要図

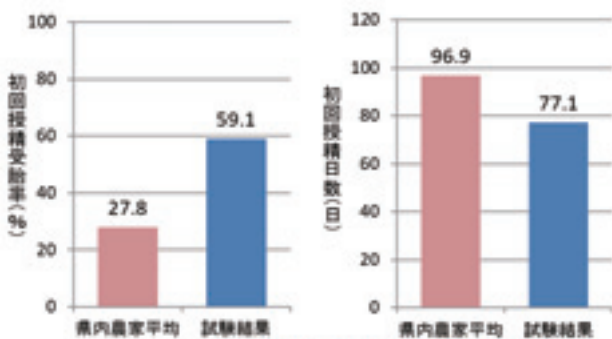


図2 早期定時授精試験の繁殖成績と県下平均の比較

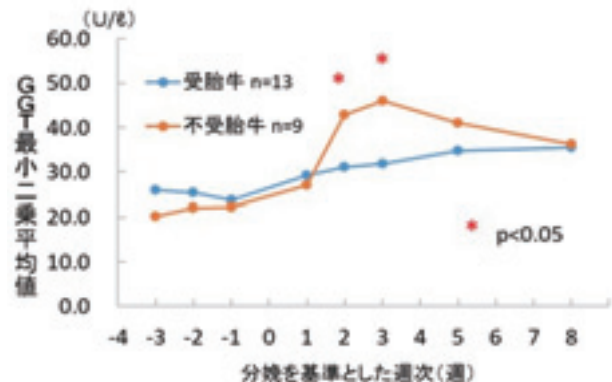


図3 受胎牛と不受胎牛のGGTの比較